

2018年度 国際マネジメント研究科 評議委員会

■青山学院大学大学院国際マネジメント研究科の評議委員会が、2018年9月8日（土）、アイビーホールにて開催されました。

■評議委員会のアジェンダは、前半に岩井研究科長より、ABSの現状と取り組みの報告がなされ、後半は「ABSは今後どのようなスクールを目指すべきか？」というディスカッションテーマで評議委員メンバーとABS教員の間で議論が行われました。

■評議委員メンバーには、「評価シート」を配り、当日の自分の発言（意見・感想）に加え、後日コメントを記述していただきました。その集められた評議委員コメントは、下記のような項目に大別して配置し、ほぼ原文のまま、そのニュアンスを活かす形でまとめました。

各評議委員の評価シートコメント（抜粋）

1.青山ビジネススクール（ABS）の取り組みの評価

■ABS志望者数などの数字を拝見しても、また実際にABSの授業を拝見しても、学校側が大変に熱心に取り組まれ、それが学生に、そして将来の志望者へと伝わっているように感じます。（委員A）

■プロモーションをしっかり進め、志願者数が着実に増えていることは素晴らしいと思います。（委員B）

■今年度もABS志願者数・入学者数共に過去最多となり、マーケティング強化の成果が実績となって表れている。財政基盤の強化も進むなど、この数年間の先生方の改善の取り組み、評議委員会での「より良きABSを目指した本質の確認と、さらなる改善を念頭に置いた一体感ある議論」が確実に成果として表れており、ABS改善の方向性と内容が正しいものであると改めて感じました。（委員C）

■よい状態の時はコンサバになりがちです。50年、100年続くビジネススクールとなるために長期的視点に立って、戦略を決定して行って下さい。（委員G）

■2018年度のABSの状況は、前年と比べさらなる志願者増、合格者増、入学者増という結果を得られたことは、ビジネススクール淘汰の時代に入った中で、高い評価を得られていることの証であると思います。（委員K）

- 志願が増え、しっかり入学者を確保するなどして、財務的基盤を確立していくなどいくつもの点において、大きく改善されているのはすばらしいことだと思います。ただし、こういった施策は、短期的なものであり、長期的にはABSをどんなビジネススクールにするかというVisionや目的を明確にして、そこへ行く戦略を立てるべきだと感じました。(委員L)

2. 現状の課題

2-1 フルタイムとフレックスについて

- 現在基本的に同じカリキュラムを行なっていますが全く別のコースとして編成しなおした方が良いのではないのでしょうか。(委員A)
- 大きく乖離しているフルタイムコースとフレックスコースについて、ABS全体一体での議論とコース別の改善を明確に区分することを提言します。(委員B)
- 専門大学院を取り巻く外部環境、またフルタイム・フレックスタイムの世代・レベル格差などの内部にも新たな課題も顕在化し、海外認証等による競合他大学や組織との競争もさらに厳しくなっており、さらなる改善取り組みの必要性を認識致しました。(委員C)

2-2 科目について

- 外部の経営資源を活用する観点で、寄附講座をより前向きに検討してもよいのではないかと。(委員D)
- アクション・ラーニングは、ABSの大きな特徴であり、魅力だと思いますのでそれを上手に伝えていただきたいと思います。(委員B)

3. 今後のあり方

3-1 フレックス、フルタイムの差別化

- フルタイム：ビジネス基礎コースとして初歩的なカリキュラムを充実させる。
留学生をターゲットとして、日本のビジネスを学ぶコース。定員増加も考えてみたら良いのでは？
フレックス：より高度な実践的なカリキュラムを充実させる。
平均年齢の高さも考え、エグゼクティブコース的なカリキュラムも取り入れる。(委員A)
- 募集人員や授業料に関してはフルタイム・フレックスのコースに差をつけ、フルタイムコースにて確実な収益を安定化させることは可能と思われます。(委員C)
- 留学生主体とフルタイムコースと日本人リカレント教育を主体としたフレックスコースの基盤が確立した上で、両コースの交流や融合、協働でのケースプログラムやグローバル

■英語は当たり前のこととする（委員L）

■フルタイムコースをABS財政基盤の安定化につなげる為にも、ABSフルタイムコースのグローバルビジネススクール化を進めることは急務と思われます。国際認証の取得、中国・北東アジア地域だけではなく、広く世界からの留学生を集めるためにも、英語研究科目・英語授業を拡充させると共に日本のビジネス商慣習文化やビジネス日本語なども選択科目として加える。また若年留学生に主眼を置き、日本・東京・青山という地の利、組織文化を生かしたビジネス・マーケティングに力点を置いたカリキュラム編成は「脱・総花的全部入り」に繋がるのではないかと考えます。（委員C）

■国際認証取得に関しては賛成です。いくつかの **Challenge** があり、その中で英語での授業をできるようにしなければならないという要求事項と現状の学生のニーズとのアンマッチは、最も大きな問題かと思えます。これはABSが日本市場内でのプレイヤーという位置付けから、アジア市場に広げ、**Target** を日本語で学びたい学生から英語で学びたい学生へと変えれば解決可能な課題となります。現に積極的な **marketing** はしなくても中国人学生が多数来ておりますので、これを **Proactive** に意図を持った **Promotion** を展開すれば、集客は可能かと思えます。（委員G）

■国際認証取得にあたっては、その標準規格の本質を理解し、プロセスを作っていくって下さい。ISOで陥りがちな、文書を作って満足し、効果的でないプロセスを作り改悪となってしまうことのないようにお願いします。（委員G）

■国際認証を取るならば、「決定的な強み」を求められるのだから、それは、今までなかったと言える「強み」を打ち出す良い機会にすべきである。（委員F）

■国際認証は取るべしです。レピュテーション向上もあります。ガバナンス強化に繋げるべきだと思います。（認証基準の形式に流されないようには留意すべし。）（委員M）

■国際認証にかんして基本的には賛成ですが、ABSが何を指すかによっては、取らないという選択肢もあるとは思いますが。ただしガバナンスは **must**！（委員L）

3-3 財政基盤

■ターゲットを広げる場合の可能性として、定年退職前の年齢層（50代前半）を考えてもよいのではないのでしょうか。人生100年時代に会社人生が終わった後も働き続けていくためには、それなりの準備が必要です。例えば多くの人が起業ができるようなプログラムには価値があるのではないかと考えます。（委員B）

3-4 地方への展開

■地方と首都圏での教育を含む知的サービス施設の格差拡大は事実であり、地方大学のビジネススクール閉鎖が続く中で、首都圏で確立した知的サービスモデルを日本の地方への展開に繋げ、地方活性化に繋げる事は使命であると考えます。特に未だ女性人口の流動性は低く、優秀な人材でも諸般の事情から地域特性から離れられないのが現実であると考えられます。ABSアクション・ラーニングの地方での開講やEラーニング展開など、ABSで確立した社会人高等教育のモデルをライセンス化し、地方の教育機関や学校法人と連携し展開する事は出来ないでしょうか？（委員C）

3-5 カリキュラム

■IOTやAIは仕事の環境を一変するだけのインパクトをもたらす始めて居ます。ビジネスマンには学びなおし・リカレント教育の機会も必要になってきています。そのような場を提供するという存在価値もABSにはあると思います。最新のビジネステクノロジーやその応用例を学ぶ場でもあって欲しい。（委員M）

■評議委員会の後「ABS体験DAY」を短時間ですが拝見しました。想像以上に実務経験15年以上ありそうなベテランの入学検討者が多く、特にその世代の女性の多さには驚きました。十分な実務経験を有している人たちが、更なる知識とネットワークの習得を求めている中、「IT・Digital transformation」など日本語プログラムを主体としたリカレント教育を基軸としては如何でしょうか。また事業イノベーション・起業創業への考察をベースとし、創造的リーダーシップの醸成をABSの特徴としていくことも可能と思われます。（委員C）

■テクノロジー：理系大学とのコラボレーションなどにより、新しい時代のビジネスモデルに関しても世界と同期できる人材、テクノロジーの専門家とパートナーシップを組み、事業を創造できる人材の育成。（委員E）

■プログラムとしては、デジタルトランスフォーメーションはやってほしい
ビジネスデータサイエンス x テクノロジー（IT）
の融合領域であり、世の中でニーズがあるか、新しい取組みが必須である。（委員J）

■先端のビジネス知識を教えるProgramを追加してほしい 例えば、AI、脳科学とマネジメント、行動科学、組織心理学、Design Thinking、Agility、People Analytics など（委員L）

■高い水準の教育を目指し、高いレベルの学生を採っていくべきである。Easyなモデル（日本語、修士論文なし）になってしまうと、他校に真似され、ビジネススクールがコモディティ化してしまう。（委員L）

4. その他の提案

- 評議委員会：各委員が1回ずつ発言するスタイルも良いのですが、ディスカッションのテーマを2、3決めて、各々について委員や先生がワイワイ言い合うスタイルもあってよいのではないかと思いました。勿論さいごに wrap-up の議論として大きな話をする必要があると思いますが。(委員A)
- 評議委員の多様な意見は参考意見であり、それらを中途半端に取り込むのではなく、特化すべきである。(委員H)
- ABSのミッションを定義かし、どういった人材を育ててきたか見える化し、ブランド価値を高めたらどうでしょうか。(委員D)
- 「地球市民 x 創造的リーダー」のミッションを愚直に追求する。ただし、もう少し評価軸を定めて定義する必要はあるが、ABSを修了すると「地球市民 x 創造的リーダー」となるというレピュテーションの生まれるまで、徹底的にコミットして取り組む。(委員F)
- 企業にとって、役に立つ人材は知識を持った人材であることは確かだが、行動する人材こそ必要である。「戦う人材を育てる」というミッションを持って欲しいです。行動するリーダーシップ知識を教えることもさることながら、自分で考え、自ら行動する人材の育成という視点を入れてほしい。(委員L)
- 「創造的リーダー」というキーワードに共感します。(委員M)
- 「国際マネジメント研究科」という学科名の再考：今は、国際／インターナショナルというより、経営は世界をひとつに見るような形、すなわちグローバルな観点を必要としています。政治はまだ、インターナショナルですが、ビジネスは、グローバルです。(委員L)
- 大学のファカルティは完全に年功的と聞きます。もし、ABSが他大学と同じような形で教授の処遇をしておられるのであれば、変革されるべきだと思います。実力主義を求める若くて優秀な先生は他大学にも数多くいらっしゃいます。大学のファカルティの処遇を変えることで、少なくとも日本で Top level の教授陣を揃えてほしいと思います。もし、すでに実力主義になっているのならよく広報してほしいと思います。(委員L)

以 上

※「2018年度評議委員会 評価シートコメント」に記載されたコメントを、抜粋（一部修正）し、掲載させて頂いております。